

読む営みの本質を改めて 捉え返させてくれる力作

書物というメディアの持つ二面性

後藤嘉宏

和田敦彦 著

►越境する書物

変容する読書環境のなか

8・5刊 A5判362頁 本体4300円

新曜社



著者和田尊氏の前書きによれば、物の日米関係（2007年）から一貫して、膨大な史料を聞き取りデータと格闘し緻密な実証を重ねながら、方法への考察も深化させている。著実に二つをなし遂げていく著者の歩みは敬服に倣する。とはいえ著者の唱えるリテラシー史は、シャルチエやターネットの読書史と重なるところもあるはずだが、とも思つて、じつは評者は前書ならびに本書を読み進めた。

著者はリテラシー史の領域を四つ挙げる。これらのうち「書物の獲得」に関わる領域

（次回）著者に着目するのではなく、本書では研究所や大学の図書館などいう読書の場を通じてコレクション形成を行う人たちを中心へ、出版・流通に携わる人たちにも着目する。視点が複合的である。

して、本書では研究所や大学の図書館という読書の場を通じてコレクション形成を行う人たちを中心、出版・流通に携わる人たちにも着目する。視点が複合的である。和田氏の前書ならびに本書

の図られた状況をつぶさに記録し、流れ全体としてみるとネットワーク社会への歩みを素描している。しかし本書の方法はまったく逆である。書物の置かれた文脈、場によつて書物の読まれ方が変わること、いう問題意識で一貫して事態を描く。そして事態の推移と方法とのこいつた齟齬、乖離は、著者自身が強く意識している。

路会たる便へシテ回に
にフランス語訳されたが、こ
のさい「読まれ方」が文脈の
異なる場でいかに変容したか
を、著者は見事に描き出す。
ネットワーク化しつつある
状況であるからこそ、書物の
来歴を問う方法が顧みられな
ければならない。本書第三章
ではダーントンの発言に引き
つけ、ケーブルバンクスの
プロジェクトが、私企業に利
潤追求の場を提供した学术雑
誌の電子化と同じ轍を踏む可
能性もあると指摘する。金、
ヒト、モノ、権力という資源
の力学のなかで形づくられる

デュー、前田愛を読書中における被引用の御三家と論しつつ、各分野で読書史が研究されながらも、御三家からの引用以外の共有部分が形成されにくい理由を、読書された場合の多様性に求めていた。

語にも妥当し、読書史を豊かにしていく。読むことの自明性を突き崩し、読書の場を形成し「情報の受容を支えていく」(広い意味での)技術を問う形で考え」(メディアの中の読者のこと)が、著者のここ十一年来一貫した方法であり、今回「読む技術として、語学力・書物の入手力、目録化力等が注目されている」と評せる。

「D—書物の形態に関わる領域」はおそらく従来の読書史と重なる。他方A「読者の形成に関する領域」は教育学寄りの課題、C「書物の管理、提供に関する領域」は図書館教育学寄りの問題で、粗くいえば接合したのが、リテラシー史であるとも読める。だが既存の読書史と大きな読後感の差がある。個人としての読者と著者とを仲介する存在としてシャルチエラは印刷・出版に膨大な人材をもつたが、これらに充てられるべきはロックフェラー財團の教育法に

ケースである。されたコレクションは、整理、目録化する外部資金として、一財団や国家防衛基づく連邦予算などで分担收集がなさる場合が大部分で、まさに予算のつくるのネットワーク化に用いられる。これが、整理、目録化するためには、書物の置かれた場を問うことである。しかし、それが現物は保管されており、書物の讀者が異なつた文脈の経験にもとづき、その書物を理解することに通じる。

場を通じて、書物を捉えざる
をえない時代をわれわれは生
きている。そのような時代に
歴史的事実を掘り起こし、方
法を鍛えるなかで、リテラシ
ー史という分野が生まれたと
も評せる。著者はかつて『メ
ディアの中の読者』(200
0)の事例でみえてきた問題では
、それらの問題を解決する
うべく、本研究では、既存の
読書史の盲点を衝いている。外
国語の書物を対象とした研究
では、必ずしも日本語の書物
を対象としたものと同様の
問題が生じる。しかし、本研究
では、日本語の書物を対象とす
ることによって、より多くの書
物が対象となることによって、
より多くの問題が浮上する。
それは、日本語の書物が、外
国語の書物と比べて、より多く
の書物が複数言語で書かれて
いることによる。つまり、日本
語の書物が、より多くの言語
で書かれており、それによって
、より多くの問題が浮上する。
それは、日本語の書物が、外
国語の書物と比べて、より多く
の書物が複数言語で書かれて
いることによる。つまり、日本
語の書物が、より多くの言語
で書かれており、それによって
、より多くの問題が浮上する。

資料も遍在する。だが遍在してもどこの場に現物は保管されている必要はある。また書物の置かれた場を問うことには、書物の読者が異なる文脈の経験にもうつき、その書物を理解することに通じる。

1943年、芥川龍之介の「舞踏会」が仏領インドシナ向けにフランス語訳されたが、このさい、「読み方」が文脈の異なる場でいかに変容したかを、著者は見事に描き出す。

ネットワーク化しつつある状況であるからこそ、書物の来歴を問う方法が顧みられなければならない。本書第三章ではダーリントンの発言に引きつけて、ケーブル・ブックスのプロジェクトが、私企業に利潤追求の場を提供した学術雑誌の電子化と同じ轍を踏む可能性もあると指摘する。金ヒト、モノ、権力という資源の力学のなかで形づくられる

場を通じて、書物を捉えざる
をえない時代をわれわれは生きている。そのような時代に
歴史的事実を掘り起こし、方
法を鍛えるなかで、リテラシ
ー史という分野が生まれたと
も評せる。著者はかつて『メ
ディアの中の読者』(200
2年)で、シャルチエ、ブル
デュ、前田愛を読書中における被引用の御三家と評しつつ、各分野で読書史が研究されながらも、御三家からの引用以外の共有部分が形成されにくい理由を、読書される場の多様性に求めていた。

読み書き能力は自明のもの、最初から与えられているものではない。母語でもそうである。ましてや外国語ではあるそのことが著しい。読む教養がなければ書物の中身を解釈することのみならず、蔵書を數理し使えるようにすることをやらねばならない。その意味で

研究機関や大学の図書館等、それぞれの研究教育の場の固有性に結びつけて読む力について考察し、リテラシー史という形で読書や蔵書を論ずる本書の方法は、既存の読書史の盲点を衝いている。外国语の事例でみてきた問題ではあるが、本書のこの方法は母語にも妥当し、読書史を豊かにしていく。読むことの自明性を突き崩し、読書の場を形成し「情報の受容を支えていく」(広い意味での)技術を問う形で考え「メディアの中の読者」していくことが、著者のこと十年來貫いた方法であり、今回、読む技術として、語学力、書物の入手力、目録化力等が注目されていると評せる。